

宗祇出生地小論

——寺院領・荘園との地縁的關係に求めて——

鶴崎裕雄

はじめに

はじめに私の結論を述べておきたい。宗祇の出生地は宗祇と同時代の景徐周麟が「種玉宗祇庵主肖像贊」に記す通り、近江国の東部であろう。問題は東部の何処か、もう少し範囲が狭まらないか。しかし、現在のところ明確な史料は見当たらない。ただそこに到達できるかも知れない方法として相国寺の荘園關係に目を向けてみよう。本稿は、相国寺の寺領から何かヒントが得られないかという提案とその理由を論ずるものである。

ミネルヴァ書房の日本評伝選の第一冊は今谷明氏の『京極為兼』で、二〇〇三年（平成一五年）の刊行であった。この評伝選は四二三冊が予定されていて（平成二三年七月現在）、私（鶴崎）も連歌師の宗祇を担当することになっている。ところが筆

が進まない。それは宗祇の誕生について、出生地についてどうまとめようかと迷っていたからである。

迷いの原因は金子金治郎氏が打ち出された宗祇の出生を近江の六角氏の重臣伊庭氏とする伊庭氏出生説にある。この呪縛から私はどう解放されればよいのか、これが逡巡の原因であった。

次に、この小論を進めるにあたって参考とし、学恩を得た先覚の宗祇に関する主な研究・論考を挙げておきたい。

- ① 荒木良雄氏「宗祇」創元社 昭和16年
- ② 伊地知鐵男氏「宗祇」青梧堂 昭和18年（伊地知鐵男著作集 Ⅰ「汲古堂平成8年 再収」）
- ③ 江藤保定氏「宗祇の研究」笠間書房 昭和42年
- ④ 江藤保定氏「宗祇連歌作品集拾遺」「鶴見女子大学紀要」9

昭和46年12月

一 近江出生説

- ⑤小西甚一氏「宗祇」日本詩人選16 筑摩書房 昭和46年
 ⑥木藤才蔵氏「連歌史論考」上・下 明治書院 昭和46年・48年
 (増補改訂版 平成5年)
 ⑦両角倉一氏「宗祇年譜稿」「山梨県立女子短期大学紀要」15
 昭和57年3月

- ⑧金子金治郎氏「宗祇の生活と作品」桜楓社 昭和58年
 ⑨藤原正義氏「宗祇序説」笠間書房 昭和59年
 ⑩両角倉一氏「宗祇連歌の研究」勉誠社 昭和60年
 ⑪島津忠夫氏「連歌師宗祇」岩波書店 平成3年(島津忠夫著
 作品集「心敬と宗祇」和泉書院 平成16年 再収)
 ⑫金子金治郎氏「宗祇の父と母と」「国語と国文学」東京大学国
 文学会 平成7年7月
 ⑬奥田勲氏「宗祇」吉川弘文館人物叢書 平成10年
 ⑭金子金治郎氏「連歌師宗祇の実像」角川書店 平成11年
 ⑮末柄豊「宗祇」「日本歴史」吉川弘文館 平成12年2月
 ⑯藤原正義氏「乱世の知識人と文学」和泉書院 平成12年
 ⑰奥田淳一氏「連歌師宗祇と近江」サンライズ出版 平成20年
 ⑱島津忠夫氏「宗祇の顔 影像の種類と変遷」和泉書院 平成23年
 以下、文中、右の書については、番号(①②…)と著者の姓
 と書名のみを掲げる。

まず、金子氏の伊庭氏出生説以前の宗祇の出生説を確かめておきたい。出生説は大きく二つあった。一は近江出生説、二は紀伊出生説である。

宗祇の出生地を近江国の東部とするのは、宗祇と交渉のあった景徐周麟の詩文集「翰林葫蘆集」² 第一一巻の「種玉宗祇庵主肖像贊」である。文中に、

宗祇老布衲、身産江東地、名暄天子寶

とある。布衲は僧侶の衣で、老は敬意を込めた老僧、天子寶は天子の領地、つまり宗祇の名は日本中に広まっている。江東地は近江国の東部、現在の滋賀県守山市・野洲市・近江八幡市・竜王町・東近江市・愛荘町あたりの何処かであろう。

景徐周麟はまさに宗祇と同時代の人物、別に軒号を宜竹といった。宗祇より一九歳下の永享一二年(一四四〇)生まれ。父は室町幕府の重鎮大館持房(三浦周行氏「足利時代に於ける上流武士の公私生活―大館持房行状の研究―」³。五歳で京都の相国寺に入った。応仁の乱勃発の応仁元年(一四六七)八月、同じ相国寺の僧横川景三とともに桃源瑞仙の郷里近江国市村(滋賀県愛荘町)に戦火を避けて疎開した。この間、景徐たちは蒲

生智閑の招きを受けて永源寺に遊んだ¹⁴。

その後、応仁の乱が収束に向かうと景徐は帰洛し、相国寺・景徳寺・等持寺に入り、明応五年（一四九六）から同九年までは相国寺鹿苑院に入って僧録を司った。永正一五年（一五一八）三月、七九歳で亡くなった。宗祇に遅れること一六年であった。後にも述べるが、宗祇の「筑紫道記」に、

船木といふ所に、昔、都相国寺にして折々頼み侍る人、此山里を占めて吉祥院とて有。今両夜の契万年の昔の語らひにも劣らず、様々の心ざし、狭き袖には包みがたくなん。

とあって、宗祇も若い頃、相国寺にいたことがわかる。年齢は景徐より宗祇の方が一九歳上である。応仁の乱勃発の年には、宗祇は関東地方にいた。宗祇が何歳まで相国寺にいたか正確にはわからないが、宗祇の「淺茅」（木藤才藏氏校注「連歌論集」二三弥井書店昭和57年）に「わきて連歌の道、三十あまりよりいかでかと思ひ侍り……」とあって、連歌師を志して相国寺を出たのが三〇歳とするならば、その年、景徐は一一歳となる。後年のことであるが、柿衛文庫や国会図書館蔵の年次未詳の和漢聯句に宗祇と景徐が同席している。【¹⁵和漢聯句作品集】にこの和漢聯句の翻刻がある。宗祇は和句一〇句、景徐は漢句四句を詠む。連衆に猪苗代兼載の初名宗春が見える。宗春より

兼載と改名するのが文明一八年末なので（『実隆公記』文明一八年一二月二日条）、それ以前の作品とすれば、宗祇六六歳、景徐四七歳以前のこと。宗祇と景徐は作品の上でも面識があったのである。

この景徐の「種玉宗祇庵主肖像贊」について、三条西実隆の日記『実隆公記』永正四年（一五〇七）五月二三日条に、

宗碩下向濃州、為暇請来、書状等言伝之、宗祇影像贊事可申宜竹之由示之、預置帰了、とあり、同年六月一三日条に、

寿首座来、聯句点到来、又宗祇影贊宜竹被草之持来、尤珍重也、早被清書可賜之由報了、

とあり、同月一五日条に、

宗祇法師肖像贊今日到来、尤自愛々々、

とある。前述のように宜竹は景徐周麟の軒号なので、日記中の宗祇影像贊は景徐の「種玉宗祇庵主肖像贊」であろうと論じられている（荒木氏「宗祇」①をはじめ、伊地知氏「宗祇」②、金子氏「宗祇の生活と作品」⑧ほか、宗祇の評伝には殆ど必ず景徐の宗祇影像贊と『実隆公記』の関連記事が触れられている）。

近江出生説は江戸時代にも引き継がれた。その中でもよく知られるものは大村由己（梅庵）の「梅庵古筆伝」で、

宗祇法師

倭歌者常縁門弟也。連歌者師心敬・宗砌。江州人。庵号種玉。斎曰自然。宜行為記有。下草・老葉・忘草等草藁尤多。

文龜二年七月廿九日死。八十一歳。

とある。文中、宜行は「宜竹」(景徐)の誤写である(金子氏『宗祇の生活と作品』⑧)。

二 紀伊出生説

近江出生説に対し、江戸時代になると紀伊出生説が台頭してくる。紀伊出生説は紀伊国内の数カ所に見られる(拙稿「紀州国人衆と寄合の文芸」^⑧)。その内、主な伝承地は有田郡有田川町下津野(旧、吉備町)と紀の川市粉河(旧、粉河町)の二カ所である。

中でも最もよく知られているのは有田川町下津野にある宗祇屋敷跡の伝承地で、大正一四年と昭和四三年に伝承地として和歌山県史跡の指定を受けている。屋敷跡のある下津野は有田川の左岸にあり、平成の大合併以前は有田郡吉備町に属していた。この吉備町は明恵上人の出身地でもあり、有田川に架かる田殿たどの橋には大樹の枝に座る明恵上人と馬に乗る宗祇の上半身像のレ



有田川町 田殿橋の宗祇(左)、明恵上人(右) レリーフ (嶋田壽宏氏提供)

リーフが飾られている。また同和教育が盛んに推進され始めた昭和三〇年代、吉備町は「同和教育は吉備町に学べ」というスローガンがあつたほど同和教育に熱心な地域であつた。同和教育が熱心であつた理由の一つに、宗祇が差別される伎楽師の子であつたという伝承がある。地元の辻岡治男氏「宗祇生誕地の一考証」⁹には、宗祇の出生・経歴が不明なのは、

中世は門地（家柄）や職業などで、政治・経済・社会面關係で差別する風潮になつていたようである。……いわゆる上流階級から閉め出されるといふ当時の世相を、宗祇は心の底から読みとり、自分の生い立ちが明らかになる言動を避けるように努力して、一生を終わつたと想像される。という一文がある。もう二〇年も前の著書であり、文章の隅々に著者辻岡氏の郷土愛が満ち溢れている。

宗祇が身分の低いとされる資料は特に紀伊出生説に集中する。早い段階で紀伊出生説に注目したのは荒木氏で、「宗祇」^①には「伝承が案外に真実を物語ることが多いので捨て難くはあるが……」とある。しかし荒木氏は紀伊出生説を展開させるのかと期待したが、すぐに否定して近江出生説に移行してしまう。

近江出生説を有力とは見ているが、「中世の謎」という特集で紀伊説を考へてみた島津忠夫氏は、なぜ紀伊出生説が生じたか、

江戸時代、里村家が連歌界を牛耳る中で宗祇の誕生地を紀伊にするのは何故かと関心を示される（島津氏「連歌師宗祇」^⑩）。島津氏所蔵の「巴聞」は紀伊出生説の資料として多くの研究書に紹介され、引用されている。この書は、付合などをいうは順の一つ書で並べた連歌書で、跋文に、

右之一冊^ノ紹巴老^ニ同宿之間私之聞書也 他見之憚 一笑々々

慶長七年八月廿九日 紹与（署名）とある。全文の終わりの方の一節に、

一、宗祇 根來寺ノ三里程辰巳ノ律僧寺ニテ髮ヲソル 母 遠江飯尾ノ筋 父ハ紀州小松原ノ猿樂師ゾ

とある。慶長七年（一六〇二）より半世紀後、承応二年（一六五三）の貪睡子の「種玉宗祇伝」^⑪には、

宗祇老人、姓三善、氏飯尾、庵曰種玉、齋称自然、…称光 天皇御宇応永二十八年辛丑生紀州粉河邑、…

とある。享保一三年（一七二八）仁木阿弥が紀伊国で書写したという宗はん著「宗祇法師伝」^⑫には、

一、宗祇の初生地は紀伊国有田郡の内藤波庄黍野と云在所の又大夫と申せし猿樂の実子也、……

猿樂にすぎ一座を催し豊後国に下る時に、宗祇父子も同

道也、宗祇は十三豊後に出入、四年逗留有し也、ある大寺の院主宗祇をあはれみ、朝暮そばを不放愛せらる、此院主九州にかくれなき歌道すきにて、有時宗祇にたはぶれ申されしは、さてもそなた心あらば、よく聞給ふべし、古詞に人は賢に馴よ、賤しきにふる、事なかれとあり、其故いかんといふに、猿楽にすけば猿楽に成、歌をすけば歌人に成ぞよと、既にそなたの頼む所の大夫こそ猿楽にすぎ、我先祖の何某の筋を捨ざるゆへに落ぶれ此国に下らる、と聞、それこそ証拠なれ、貴所は必々今より後は猿楽道をすて歌人になれとて、古今一部取出し宗祇に送られ、素説相伝有しと也、

とある。このように身分の低いとされる伎楽師・猿楽師出身の宗祇が連歌師として大成するという伝承は、主に紀伊出生説と重なって伝えられている。

江戸時代に入ると、それまでの芸能や文芸が血縁関係の、いわゆる家元制度に移行する。絵画しかり、茶道しかり、活花しかりである。絵画の狩野派と同様、連歌の南北の里村家が独占的に幕府の保護を受けた。この流れと宗祇の紀伊出生説、さらに低い身分の出生という伝承は何処かで関わるのではないか。右の島津氏の示された関心に便乗して、大変な迂闊た考えであ

るが、私（鶴崎）は、連歌の大先達である宗祇の出生の身分を低めることによって、逆に里村家の格式を高めようとしたのではないかとも推測してみた。

出生地ではないが、和歌山県下には宗祇に関わる伝承地が多い。例えば貞享五年（一六八八）『笈の小文』で芭蕉が紀三井寺を訪れた時、

紀三井山下空太に休らへば宗祇の故事をねもごろにをしへて

宗祇にも廻りあひたりおそ桜（『新撰翁草』）

と詠んだ宗祇坂という伝承地があった。また田辺市元町には宗祇翁旧跡が現存している。

三 金子氏の伊庭氏出生説

以上のように宗祇の出生については大きく近江出生説と紀伊出生説とが存在した。この内、近江出生説をさらに絞ったのが金子金治郎氏の伊庭氏出生説である。

伊庭氏出生説の発端は金子氏「宗祇の生活と作品」⑧である（以下、金子氏の論の展開については奥田氏「宗祇」⑬を参照した）。

金子氏は、『宗祇の生活と作品』⑧において、岩国吉川家蔵の蒲生殿人々宛、『古文書時代鑑』上巻所収の浅野家蔵の□生殿御宿所宛、及び昭和四一年五月の三都古典連合会の古書の『展観入札目録』の掲載写真の蒲生殿御宿所宛の三通の宗祇書状に注目した。特に金子氏が注目した三都古典連合会『展観入札目録』の書状は、

先度八木拝領之時

御返事申候 仍已前申候

伊勢之人神戸方之事故

連々罷下候へと被申候 親

之時ちかつき候し間左様之

儀候哉 度々音信候間 強

可下存候 但宗益 先彼

地へ罷越候て左右可申由に候

其様へ定而可申候 我等事も

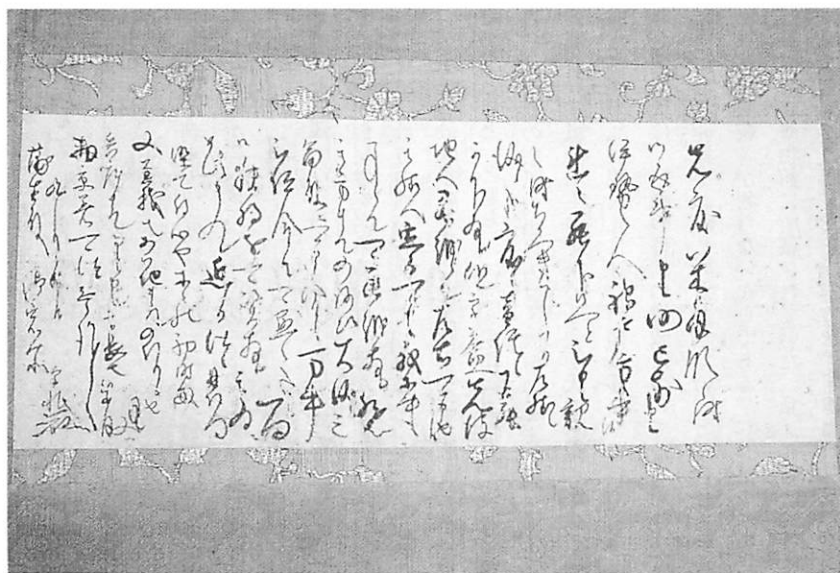
承候て可罷越存候 然者

其方までの路次大儀候 三

富殿ニ可申入存候 万事

被仰合て可懸候事候 一向

御扶持を可憑存候 其為ニ



大阪市立歴史博物館蔵 蒲生殿御宿所宛宗祇書状

如此申入候 近日仕候発句

染て待心や木、の初時雨

又兼載はあは地までのほり候由承候

兵庫までなと申候 宗長は来月

初京着可仕候 恐々謹言

九月□日 宗祇(花押)

蒲生殿 御宿所

とある。後述のようにこの「展観入札目録」の宗祇の書状は、現在、大阪歴史博物館蔵である。

金子氏はこの書状中の「伊勢之人神戸方之事」を「近江を追われて伊勢へ移った六角佐々木の関係者」と考え、延徳三年(一四九二)八月、將軍足利義材が前將軍義尚に倣って六角高頼を攻め、翌年明応元年には高頼勢が甲賀や伊勢に逃れた中の人物の一人で、神戸(鈴鹿市)に居る者と推測する。さらにこの「親之時ちかつき候し間」を宗祇の「親が親しくした」のが「伊勢之人」と解釈し、宗祇の親を「六角高頼の周囲の者と親しい関係にあったらしいと推測することができた」と結論した。

さらに金子氏は論を進め、「宗祇の両親の家筋をまとめて考察」したのが、金子氏「宗祇の父と母と」⑩である。この中で、金子氏は「伊勢之人」を六角高頼の母か祖母と推定して、この

「伊勢之人」を蒲生城に迎える了解を取り付けようとする書状と解釈する。こうした書状が出せるのは宗祇が「親之時ちかつき候し間」つまり親(父)に連れられて六角氏の近くに伺候したからであり、「大乘院寺社雜事記」の文明一〇年三月八日条「自宗祇方書状到来、伊庭之弟八郎上洛、六角進退事申入歟」の記事、さらに宗祇没後二二年の作品であるが、三条西実隆・宗長・宗碩の三吟「伊庭千句」を分析し、宗祇を六角氏の近くに連れて行った「親」は六角氏の重臣伊庭氏一族の者であると論じた。また宗祇が飯尾姓を名乗るのは、母が管領細川氏の被官飯尾氏の出身で、母方の姓を名乗ったと論じる。

金子氏の最晩年の著書「連歌師宗祇の実像」⑪の第一章は「宗祇の父と母と」と題し、「近江・紀伊両説併記に決着をつけるため、私なりの宗祇の出自の謎への解答をまとめたものである」と記す。宗祇の出生地を求める金子氏の一徹さが感じられる。

古書展の「展観入札目録」の掲載写真を資料に論をまとめられた金子氏は、宗祇の書状の掲載についてたびたび「原本所蔵の方には、非礼をお許しいただきたい」と断られていた。古書展以後の所蔵者が判らないからである。じつはこの書状の原本は大阪市立博物館に所蔵されていた。私(鶴崎)が初めて書状の原本を見たのは平成二二年の秋、同博物館所蔵の連歌資料を

調査した時である。宗祇書状の現物を見て、私の背筋に電流が走った。金子氏はこの前年、平成一年に亡くなられていた。ご存命中に大阪市立博物館所蔵の報告がきたらどんなに喜ばれただろうかとつくづく思ったものである。その後、博物館は大坂城内より馬場町に移築され、大阪歴史博物館となった。

金子氏の伊庭氏出生説に対して、学説発表の常として、疑問や否定の見解が投げかけられた。まず藤原正義氏が、藤原氏「宗祇序説」⑨のあとがきで「摂津細川・塩川・吉川氏との関係等々について私按とは所見を異にしていることを付記するにとゞめる」と記した。藤原氏はこれより以前に、塩川氏をはじめとする大阪府下の北摂地域の国人の記録「高代寺日記」を資料にして宗祇を摂津能勢地方の国人の出身とした。さらに藤原氏「乱世の知識人と文学」⑮では「宗祇は応永廿八年（一四二二）摂州能勢在地の武家の子として生まれ、やがて喝食として相国寺に入り……」として宗祇の能勢氏出身を明言した。私（鶴崎）自身、かつて「高代寺日記」を論じたことがあるが、私にはこの記録は史料的价值は低く、宗祇出生地を論ずるにはほど遠い内容という印象が強かった。いずれにせよ、まず藤原氏が金子氏の伊庭氏出生説に異論を唱えた。

奥田氏の「宗祇」⑬では、金子氏の伊庭氏出生説について、

「ここに至るまでの推論は論文に就かれないが、金子氏があげている根拠はどれも推測を必要としていて確証に欠ける。否定はできないが肯定するのも躊躇されると言わざるを得ない」と述べる。私もこの奥田氏には全く賛成である。なぜなら伊庭氏出生説は、「伊勢之人」が「親之時ちかつき候」を、伊勢にいる人Ⅱ六角氏当主の祖母あたりに父親に連れられて少年宗祇が近侍したという解釈に基づく。こうした解釈に基づく推測なので肯定も否定もできないのである。

さらに金子氏は「伊庭千句」を分析し、千句の願主種中務丞貞和は伊庭氏出身で、願主の願いは伊庭氏と六角氏との関係修復にあり、宗祇と親しい関係にあった三条西実隆や宗長・宗碩に三吟を依頼したと推測する。かつて私も「伊庭千句」について論じたことがあるが、どうも実隆たちは宗祇と伊庭氏との関係を意識していないようで、実隆の日記「実隆公記」には連歌の始まる前にはあまり乗り気でないような書き振りである。私には「伊庭千句」と宗祇の関わりはあまり感じられない。

金子氏の「伊勢之人」が「親之時ちかつき候」の解釈には末柄豊氏も「奥田勲著『宗祇』」⑮で異を唱える。これは吉川弘文館人物叢書の一つ、奥田氏「宗祇」⑬への書評であるが、末柄氏も宗祇の出生について関心を持ち、書評全体の四分の一以上

のスペースを費やしている。その中で「親之時ちかつき候」の「親」は「宗祇を招いた伊勢国人神戸具盛の父（実は伊勢国司北畠政郷（初名政具）・養父神戸某（貞正）」のいずれであるか不明）のことで、宗祇の父のことではない」と説く。

以上、宗祇の出生地に関する伝承や諸説であるが、何分私（鶴崎）の誤読や誤解があるので、それぞれのご著書やご論文をお確かめいただくとありがたい。

四 近江国東部の相国寺領（荘園）を求めて

本稿の冒頭で私（鶴崎）の結論を述べたように、宗祇の出生地は近江国の東部と考える。問題は東部の何処か、もう少し範囲が狭まらないか。そこで相国寺に関係のある近江国東部の土地を探してみても、具体的には相国寺の寺領や荘園関係に目を向けてみてはどうかという提案なのである。

稿を進めながら、執拗に「宗祇の生まれた江東の比定地」を求めた金子氏の研究態度には感心する。推測に推測を重ねた論とはいうものの、その一徹さには頭の下がる思いである。実は金子氏は「宗祇の生涯にとつての相国寺は、きわめて重要であつて、宗祇の生活の節目や側面が、相国寺生活によつて解明さ

れるといったことも、存するように思われる」と記す（金子氏『宗祇の生活と作品』⑧）。私も相国寺や、相国寺の寺領や荘園関係から出生地解明のヒントは得られないものかと思うのである。

ここで述べたいのは、中世、殊に戦国期、地域の寺院がその地方の教育、土地の子弟の教育に大きく関わっていたことである。上杉謙信や伊達政宗たちが幼少期、地域の寺院に預けられたことは戦国武将伝に数多く見られる。これは決して物語ではなく史実として存在する。それも人的または地縁的關係によつて結ばれるのである。二、三の例を挙げて考えを進めたい。

宗祇の第一の弟子、宗長の場合、宗長は上洛して宗祇に連歌を学び、一休宗純に禅を学んだことはよく知られている。応仁の乱で疲弊した大徳寺を復興した一休は大徳寺の開山宗峯妙超（しょうけう）やその師である南浦紹明（なんぷしやうめい）（大応国師）を信奉していた。さらに一休は山城国薪（京田辺市）の南浦旧跡の妙勝庵を再建し、隣接して酬恩庵を建て、この庵で亡くなった。この一休が信奉していた南浦は駿河国の出身で、安部郡服部（はつろ）の建穂寺（たねほじ）で出家した。同国の宗長も建穂寺に入って出家し、今川氏に仕えた後、上洛して一休の門に入った。ここに時代は離れるが、南浦と宗長は同国という地縁的關係があり、同じく時代は隔たるが南浦

と一休は信奉という人的関係があり、南浦を仲介に一休と宗長が結びつくのである。宗長の『宗長手記』下に、薪の酬恩庵に滞在中、醍醐寺に赴いた時、

宗長の師匠、駿河の宰相として此院家に宮づかへせし人也

という一文がある。『静岡市史』原始古代中世の「連歌師宗長」を執筆した中川芳雄氏は建徳寺が醍醐寺の末寺であることから、宗長が得度したのは建徳寺であると断定した。¹⁸私（鶴崎）もこの断定は正しいと思う。宗長は幼少年期、地元建徳寺に入り、教育を身に着けたのである。¹⁹

地域の子弟が幼少年期を寺院で過ごし、教育を受け、教養を身に着ける例は興福寺の尋尊の日記「大乘院寺社雜事記」に幾つも見ることが出来る。興福寺には幾つもの子院がある。尋尊の大乘院にも在地の子弟たちが入ってくる。子弟の身分は様々で、高貴な者は尋尊と対等に、または側近として寺院で安穩と暮らすことが約束される。しかし身分の低い者は雑役に追われ、出家しても下級僧として勤めを果たす。中には借財の質に代わって寺院に送られた者もあった。

大乘院の稚児、愛満丸は尋尊に寵愛される衆道（男色）であり、興福寺で教育を受けた一人である。愛満丸の父鶴又四郎は土豪の下人クラスの階層であろう。愛満丸については森田恭二

氏の論考がある。²⁰愛満丸が大乘院に入ったのは寛正二年（一四六一）十一月のこと、五年後「大乘院寺社雜事記」文正元年（一四六六）二月二六日条には、

一、愛満丸部屋月次連歌始之云々、

とある。「云々」とあるので、記主尋尊はこの連歌には参加しなかったであろうが、寵愛する愛満丸の部屋で行われた連歌、多分愛満丸が主催したのであろう、それも毎月行われる月次連歌の始まりである。連歌には式目など複雑な規則があつて、ある程度の習得に時間がかかる。前句との付合には和歌や故実の知識を必要とする。愛満丸はそれらの知識、学問や教養を身に着けて「部屋月次連歌」を開始したのであろう。勿論それまでに幾度も連歌の場を踏み重ねたであろう。尋尊が熱心に指導したであろうことはいうまでもない。大乘院に入る以前、愛満丸には連歌についてどれほど知識があつたかは全く判らない。多分皆無に等しかったのではないか。愛満丸は他の稚児たちと同じように、こうして寺院内で教養を積み、学問を励む。寺院は現在の大学である。

それではどのような授業が行われたのであろうか。いわゆるカリキュラムにはどのようなものがあつたのか。

内閣文庫に「難波草紙」（二〇四―一八六）という本がある。翻

刻には濱中修氏の「資料翻刻」内閣文庫蔵「難波草紙」⁽²⁾があり、和泉国の国人新川氏^{ニギハヤヒ}を研究する近藤孝敏氏によって、著述か筆

写か所蔵かは判らないものの、戦国末期から江戸時代初期の土豪新川三十郎盛政、別号三慶との関わりが明らかにされた。また目下、山村規子・大利直美氏によって詳細な研究が進行している。この草紙は、「内閣文庫国書分類目録」には「中世小説」とあるが、内容は稚児の守るべき教訓書で、あげられる文芸・芸能のジャンルは、歌道・連歌・鼓・大鼓・笛・鞠遊・乗馬などである。最後に若衆の道、念者に対する心得や態度が記される。つまり「難波草紙」は衆道の守るべき教訓書である。しかし一般の稚児の教訓書とは全く変わらないう。寺院にあっては衆道はごく普通のことであって、今日のように目くじらを立てて議論するものではなかった。連歌書の一つを紹介したい。宗祇の選んだ「竹林抄」を同時代の兼載が講釈した「竹聞」^{ちくぶん}に、

花の枝もかくなる物か夏木立

智湛

という発句を、

うつくしき児ノ入道ニナリタルヤウ也

と評している。美しく咲いた桜の枝も夏にはこんな葉の繁った木立になるのかという句を、可愛い稚児が遅しい入道になるよ

うだというのである。日常見かける寺院内の稚児の成長であり、「うつくしき児」には衆道の雰囲気も漂っている。

あまり衆道・男色を述べて、私（鶴崎）が宗祇を衆道とか男色といっているように誤解されては困る。言いたいのは中世の寺院は重要な教育機関であり、特に地方の、国人衆や土豪の子弟が、時には愛満丸のような下人クラスの子弟も、教育を受けたことである。そして寺院に入って教育を受ける機会、そこには人的・地縁的関係が存在したであろうということである。

宗祇が相国寺に入った動機、金子氏は「蔭涼軒日録」によって支配下にあった近江の寺院として、金剛寺・安楽寺・永明寺・篠原正法寺・山上含空院その他を挙げる。私はこの金子氏の発想に賛成である。宗祇の出生地を求める有効な手法である。もう一つ、相国寺の寺領・荘園で近江国東部にあるものを求めることである。それでは相国寺の寺領や荘園にはどのような資料があり、どのような研究があるのか。

手頃な方法として歴史民俗博物館の日本荘園データベースの検索から始めると、野洲郡の玉造荘（野洲市野洲）と蒲生郡の綺田荘^{かいた}（東近江市綺田町）の二か所ある。宗祇と同時代の史料としては「蔭涼軒日録」に見える。「蔭涼軒日録」は全五巻、一応、玉造荘・綺田荘の記事を抜き出してみた。ただし抜き出

しただけで、宗祇の出生地を示すような記事は全く見当たらない。

〈玉造莊〉

長祿3年12月26日 当寺領玉造内花園人足事。如旧被還付于寺家。即可被成御奉書之由被仰出。即命于飯尾左衛門大夫也。

長享2年6月22日 当寺都文侍衣持奉書来、蓋江州玉造郷、八木大国御返付之立紙之奉書也。両所之地下江被成奉書一通。以上三通一覽返之。

延徳3年9月1日 大智院月翁来降。……又曰、御喝食御所御領事。於江州二ヶ所有之。先且可白之。一所建部社領也。彼社務出重書。彼在所可有御知行。然者土員三分一者可預御扶持。近年者守護被官伊庭南押領也。昔者七百石在所也。今者三四百有之乎。一所玉造庄内一名也。二百石許在所也。近年山内方押領也。自然時者被説破于葉室公、為幸云々。建部宮者勢多之橋之辺仁有之云々。

延徳4年9月13日 自方丈以侍衣云、昨日為上意被仰出子細者、当寺領江州玉造庄代官職事、飯尾加賀守仁被仰付云々。然間今日鳴退鼓可退云々。返答云、今日退太不可然。十六日御祈禱已後可有御退之由被仰出、就玉

造庄事、有御退。則对公方御逆鱗也。太不可然。明日明後日兩日過者自然可有退。兩日間事者兎角被仰延云々。如此白事非予意見。侍衣有御意得可有御宰云々。

延徳4年9月16日 当寺出官来云、今日於方丈有評定。江州玉造庄事可致訴訟。可預御披露。為評定衆使来云々。予云、江州寺社本所領一國平均如此。然者雖有訴訟、白次人不可有之。予披露事斟酌也。以寺奉行可有御訴訟云々。

明応2年3月8日 午後料都文来。面之打話。勸以煮雲并盃、話云、玉造庄補任取之。惟明和尚住持時取之。三千足折紙遣之、未入手。々々者相定所々御札可白云々。

明応2年3月9日 齋前料都聞持一纏来。蓋江州玉造庄補任錢也。不面之。謝詞丁寧。

〈綺田莊〉

長祿3年4月14日 当院領綺田庄木引人夫之事。被嘆白之分伺之。命于当院奉行飯尾左衛門大夫、寿徳院敷地、不為寺家成敗之由、端溪和尚以書状被自分披露之命于飯尾加賀守也。

長祿3年10月24日 当院領江州綺田年貢怠慢事、召百姓可被仰付之事。

長祿4年4月25日 当院領綺田百姓、雖成召文不參洛之事。并備後国寺領遵行未出之事伺之。命院奉行飯尾左衛門大夫也。

寛正3年12月19日 当院領江州安孫子綺田庄、就八王寺造营要木伺之。可被成御免除之御奉書之由、院奉行飯尾左衛門大夫可命于山門奉行布施下野守之由被仰出。即命之。

寛正5年6月23日 当院領江州綺田庄与御料所伊勢守知行麻生莊、用水爭論之事。自院主龍岡和尚以訴狀被申之。故於殿中先与伊勢守談之。無為之成敗、可申付之由被申。仍以当院主事并出管、命于彼代官蛭川式部丞也。

長享2年9月27日 院領江州綺田之事、七十年以後寺家直務之处、花山院直入部彼在所。蒲生延入之。重而可被成御下知之由披露為幸。愚云、然者奉書与御一行可調賜云々。乃一行奉書案賜之奉行飯尾加賀守。可被仰付云々。寺家半分、花山院半分。收納之在所也。古勘定状如此。瑞臻監寺庄主時也。自花山被自分者、寺家三分一、家門三分二取之云々。

長享2年10月2日 自鹿苑院以納所院領江之綺田之事、与花山院有爭論之子細、可成奉書之由自東府飯尾加

賀守雖被仰付。日数之御暇之故書上事。斟酌之由白之。自此亦遣人被督之為幸。乃遣丹光於賀州宅督之。賀州对面云。日数御暇之由難義之由白之。堀河殿有御一行者、可書上之由、白于鹿苑院。非如在之義由丁寧云々。

長享2年10月13日 斎罷鹿苑院來降。見伸江左途中辛勞之謝。就江之綺田之事。花山院殿遣鹿苑院之一行有之。一見耳。時勝定翁亦來。鹿苑命普門新命曰。江之御陳以參詣可致入寺之礼。自天龍南禪以前入寺之故。先一人可參云々。

長享2年10月21日 与堀川殿談合之。堀曰依綺田之義相公御機嫌不好也。若自此状之趣者、一向寺家事不可有御知之由被仰出。後者不可有二之句。

延德3年6月2日 於葉公第鹿苑同侍衣侍葉公。々々自御前帰乃对面。仍侍衣江州綺田目安出之。葉公一見之云、花山院支証明鏡也。相公以前有御覽。雖然自鹿苑相公于今当知行之在所不可有相違歟云々。乃出千疋之折紙退出。往慈泉庵。鹿苑同侍衣及愚喫榻榻。

延德3年6月17日 鹿苑侍衣院主一行持之來。蓋綺田事也。面話。謁相府条々書立說向葉室公。一、御法名事……。二、御道号事……。三、三合院御成事……。四、來廿四日普広院



佐久良川にかかる綺田橋

殿御年忌御焼香事……。五、中昇蔵主事……。六、就綺田事。鹿苑一行経葉室公一見云。寺家支証紛失之故、訴訟之儀難立。雖然百余年当知行上者、庄主職事者如先規、為寺家拘之。本役事者嚴重花山院江可執沙汰。若又公用無沙汰、則其時可有御訴訟乎云々。七、因州聖応寺入寺全取首座書立事。……六、両奉行披露時、此一行供台覽可白之命有之。

延徳3年6月24日 又云、綺田事其後如何。愚云。来廿六日御参内以前者諸公事定可被閣。可被相待云々。

玉造荘と綺田荘の内、私は綺田荘に魅力を感じる。それは応仁の乱を避けて、応仁元年（一四六七）八月、相国寺の桃源瑞仙たちが疎開した郷里市村（滋賀県愛荘町）が綺田荘に近いからである。しかしこれも宗祇の出生地を示すものではない。ただ綺田を流れる佐久良川の上流には、景徐たちを庇護した蒲生智閑の館のある佐久良があり、蒲生氏の本拠地日野が近いのである。

五 各伝承地の宗祇顕彰の現状

最後に宗祇に関わる各地の宗祇顕彰の現状というか、問題点

に触れておきたい。

平成一四年(二〇〇二)は宗祇没後五〇〇年にあたり、各地で宗祇に関する記念行事があった。その一つ、和歌山県吉備町(現、有田川町)では同年三月三日、記念サミットが開催され、パネルディスカッション「今に生きる宗祇」が行われた²⁾。司会の嶋田壽宏氏の下、私(鶴崎)がコーディネーターを承ったのであるが、参加者の顔触れと各地の宗祇との関係を紹介すると、

長谷川美雄氏 滋賀県能登川町(現、東近江市) 〓 金子金治郎氏による宗祇出生地の比定地

栗山重雄氏 和歌山県吉備町(現、有田川町) 〓 宗祇出生地の

宗祇屋敷伝承地

金子徳彦氏 岐阜県大和町(現、郡上市) 〓 古今伝授の東常縁

館跡

福手寛氏 岐阜県八幡町(現、郡上市) 〓 古今伝授時の住居跡

白雲水

杉中浩一郎氏 和歌山県田辺市 〓 宗祇庵、近くの御坊市には宗

祇の庇護者湯川政春の居城

芹澤充寛氏(静岡県裾野市) 〓 宗祇の墓所桃園の定輪寺

ディスカッションを前に、各地の宗祇顕彰の具体的な取り組

みを報告することとし、宗祇の出生地は我が町というような話
はしないことを約束した。このように伝承地も含めた宗祇の関
係地が集まり、各地で宗祇の顕彰がどのように行われているか、
報告し合うのも、また有意義であった。

最後に、金子金治郎氏が宗祇の出生地と比定した能登川町
(現、東近江市)でも盛んに宗祇の顕彰が行われていることを記
しておきたい。東近江市立図書館能登川支所(旧、能登川町立
図書館)の裏庭には長髯の宗祇座像のレリーフがあつて、

ふるさとにて

かげ涼し 南のみ山 北の海

の発句を浮き立たせた宗祇顕彰碑が建つ。側面に、

顕彰碑建立によせて

和歌の西行 俳句の芭蕉と共に日本三大漂泊白詩人と言われ
る室町時代の連歌師 宗祇(一四二二—一五〇二)の出自

について このたび 金子金治郎氏(広島大学名誉教授)
が宗祇の父は近江国守護職 六角家の重臣 守護代伊庭氏
であるとの学説(金子氏著 宗祇の父と母と)を発表され

ました わが能登川町出身であるとの確定した今日 自然…
人・平和を愛した師の遺徳を讃え建立するものです

能登川町



東近江市立図書館の宗祇顕彰碑

平成十一年五月吉日

とある。文中、「このたび金子金治郎氏（広島大学名誉教授）が……学説（金子氏著「宗祇の父と母」）を発表されました」として顕彰碑建立の根拠を明記されていることに注目しておきたい。

現状では景徐周麟がいう「江東」をさらに狭めて宗祇の出生地を求めることは不可能である。何しろ十分な史料を欠くからである。私も「宗祇」の執筆を始めなければならない。

〔注〕

- (1) ①荒木良雄氏『宗祇』創元社 昭和16年
 ②伊地知鐵男氏『宗祇』青梧堂 昭和18年（伊地知鐵男著作集I）汲古堂平成8年 再収）
 ③江藤保定氏『宗祇の研究』笠間書房 昭和42年
 ④江藤保定氏「宗祇連歌作品集拾遺」『鶴見女子大学紀要』9 昭和46年12月
 ⑤小西甚一氏『宗祇』日本詩人選16 筑摩書房 昭和46年
 ⑥木藤才藏氏『連歌史論考』上・下 明治書院 昭和46年・48（増補改訂版 平成5年）

⑦ 阿角倉一氏「宗祇年譜稿」〔山梨県立女子短期大学紀要〕15昭和57年3月

⑧ 金子金治郎氏「宗祇の生活と作品」桜楓社 昭和58年

⑨ 藤原正義氏「宗祇序説」笠間書房 昭和59年

⑩ 阿角倉一氏「宗祇連歌の研究」勉誠社 昭和60年

⑪ 島津忠夫氏「連歌師宗祇」岩波書店 平成3年（島津

忠夫著作集四「心敬と宗祇」和泉書院 平成16年 再収）

⑫ 金子金治郎氏「宗祇の父と母と」〔国語と国文学〕東京大学国文学会 平成7年7月

⑬ 奥田勲氏「宗祇」吉川弘文館人物叢書 平成10年

⑭ 金子金治郎氏「連歌師宗祇の実像」角川書店 平成11年

⑮ 末柄豊「宗祇」〔日本歴史〕吉川弘文館 平成12年2月

⑯ 藤原正義氏「乱世の知識人と文学」和泉書院 平成12年

⑰ 奥田淳一氏「連歌師宗祇と近江」サンライズ出版 平成20年

⑱ 島津忠夫氏「宗祇の顔 影像の種類と変遷」和泉書院 平成23年

(2) 景徐周麟「種玉宗祇庵主肖像賛」〔翰林葫蘆集〕第一一卷

上村観光編「五山文学全集」第四卷 思文閣 昭和48年復刻

(3) 三浦周行氏「足利時代に於ける上流武士の公私生活―大館持房行状の研究―」〔史林〕一六ノ一 昭和6年1月

(4) 拙稿「日野の中世文学」〔近江日野の歴史〕第二卷 中世編 平成21年

(5) 「筑紫道記」新日本古典文学大系51「中世日記行集」岩波書店

(6) 「謡和漢聯句作品集成」京都大学国文学研究室・中国文学研究室編 臨川書店 平成20年

(7) 「梅庵古筆伝」続群書類従 三二輯下 続群書類従完成会

(8) 拙稿「紀州国人衆と寄合の文芸」〔和歌山県史〕中世 和歌山県 平成6年

(9) 辻岡治男氏「宗祇生誕地の一考証」吉備町教育委員会 平成3年

(10) 島津忠夫氏「宗祇の空白を埋める鍵」〔国文学〕学燈社 昭和56年6月

(11) 島津氏所蔵の「巴間」は島津氏「連歌の研究」角川書店 昭和48年に翻刻がある

(12) 貪睡子「種玉宗祇伝」鈴木弘宣氏「紀伊有田郡先賢伝」和歌山県有田郡教育会 昭和9年 平成15年復刻

(13) 宗はん「宗祇法師伝」〔吉備町誌〕ぎょうせい 昭和55

年、伊地知氏「宗祇」②所収の高野氏本「表句秘講（天水抄）

宗祇筑紫紀行」の後付の宗祇伝とはほ同文

(14) 藤原正義氏「高代寺日記考」北九州大学文学部紀要 昭和56年12月～57年8月

(15) 奥田淳一氏「連歌師宗祇と近江」⑦の第12章「宗祇と蒲生氏」には大阪歴史博物館蔵「宗祇書状」について触れられている。しかしここでは金子氏の伊庭氏出生説については述べられていない。これも一つの意思表示として拝見した

(16) 拙稿「撰津国人領主塩川氏の記録」関西大学史学会「日本史学論集」昭和50年

(17) 拙稿「近江国人衆の千句連歌興行―永原千句・十花千句・伊庭千句―」「日本文化史論叢叢」柴田實先生古稀記念会 昭和51年

(18) 中川芳雄氏「連歌師宗長」「静岡市史」原始古代中世 静岡市役所 昭和56年

(19) 拙稿「戦国を往く連歌師宗長」角川書店 平成12年

(20) 森田恭二氏「稚児愛満丸二十八年の生涯」帝塚山学院短大年報46 平成10年12月、「大乘院寺社雑事記研究論集」1

平成13年 和泉書院 再録

(21) 拙稿「大乘院寺社雑事記」に見る連歌興行(二)」「大乘

院寺社雑事記研究論集」2 平成15年 和泉書院、「大乘院

寺社雑事記」に見る連歌興行(三)」「大乘院寺社雑事記研究論集」3 平成18年 和泉書院

(22) 濱中修氏「資料翻刻」内閣文庫蔵「難波草紙」二「文学研究稿」4 中央大学文学研究稿の会 昭和57年11月)

(23) 「蔭涼軒日録」玉村竹二・勝野隆信校訂編集 史籍刊行会

(24) 「吉備町宗祇法師五百年祭記念誌―今に生きる宗祇―」宗祇法師五百年祭実行委員会 平成14年

本稿執筆に当たって和歌山県有田川町の嶋田壽宏氏のお世話になり、また現地調査では中世公家日記研究会の湯川敏治氏・大乘院寺社雑事記研究会の竹地亜樹さんのご協力を得た。お礼申し上げる。

(つるさき ひろお・帝塚山学院大学名誉教授)